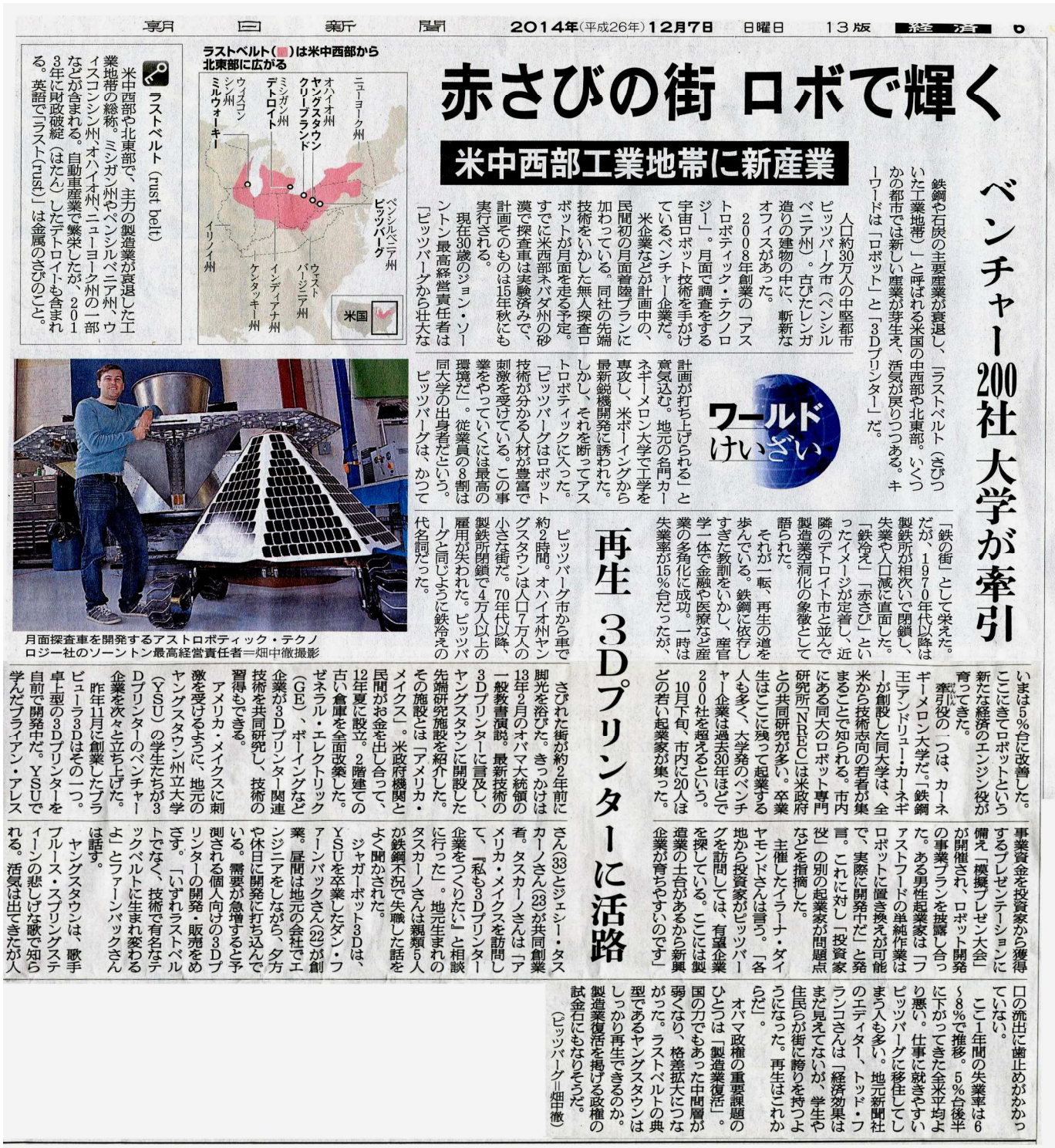
鉄の雑記帳　　赤さびの街　ロボで輝く　　2014.12.7.　朝日新聞　朝刊記事より

鉄の街　栄光のUS Steelの本拠地「ピッツバーグの再生」

「ピッツバーグ」　もう30年近く前　訪れたことがあるアメリカ　US Steelの本拠地である鉄の街。
鉄に携わる者にとってあこがれだったUS Steelの街・鉄鋼王カーネギーの街である。

当時1980年代　アメリカの鉄鋼は日本に押され、不況の中　街のあちこちに閉鎖された工場跡が見られ、厳しい現実にさらされている中での訪問。ゴールデントライアングルと呼ばれる川の合流点を中心に高層ビルや工場が広がる街で、US steelビルの最上階から見たどこまでも続く平地の向こうの地平線に沈む夕日にすごく感動し、互いに協力し、いつの日か復活してほしいとの願いを持ちつつ、街を離れた記憶がある。

そのピッツバーグが　街にあるカーネギーメロン大を卒業した若き企業家たちの頭脳と「ものづくり」技術によって復活したとの記事。　アメリカの金融ではなく製造業復活が鉄の街　ピッツバーグから始まったと聞いて　うれしくなっています。
日本でもこんな創造性豊かな新製造業での街再生の日が早く来ればいいと



朝日新聞　2014年(平成26年)12月7日　日曜日　13版

赤さびの街 ロボで輝く

米中西部工業地帯に新産業

ベンチャー200社 大学が牽引

鉄鋼や石炭の主要産業が衰退し、「ラストベルト（さびついた工業地帯）」と呼ばれる米国の中西部や北東部。いくつかの都市では新しい産業が芽生え、活気が戻りつつある。キーワードは「ロボット」と「3Dプリンター」だ。

人口約30万人の中堅都市ピッツバーグ市（ペンシルベニア州）。古びたレンガ造りの建物の中に、斬新なオフィスがあった。

2008年創業の「アストロボティック・テクノロジー」。月面で調査をする宇宙ロボット技術を手がけているベンチャー企業だ。

米企業などが計画中の、民間初の月面着陸プランに加わっている。同社の先端技術をいかした無人探査ロボットが月面を走る予定。すでに米西部ネバダ州の砂漠で探査車は実験済みで、計画そのものは15年秋にも実行される。

現在30歳のジョン・ソーントン最高経営責任者は「ピッツバーグから壮大な計画が打ち上げられる」と意気込む。地元の名門カーネギーメロン大学で工学を専攻し、米ボーイングから最新鋭機開発に誘われた。しかし、それを断ってアストロボティックに入った。

「ピッツバーグはロボット技術が分かる人材が豊富で刺激を受けている。この事業をやっていくには最高の環境だ」。従業員の8割は同大学の出身者だという。ピッツバーグは、かつて「鉄の街」として栄えた。だが、1970年代以降は製鉄所が相次いで閉鎖し、失業や人口減に直面した。「鉄冷え」「赤さび」といったイメージが定着し、近隣のデトロイト市と並んで製造業空洞化の象徴として語られた。

それが一転、再生の道を歩んでいる。鉄鋼に依存しすぎた教訓をいかし、産官学一体で金融や医療など産業の多角化に成功。一時は失業率が15%台だったが、いまは5%台に改善した。ここにきてロボットという新たな経済のエンジン役が育ってきた。

牽引役の一つは、カーネギーメロン大学だ。「鉄鋼王」アンドリュー・カーネギーが創設した同大学は、全米から技術志向の若者が集まることで知られる。市内にある同大のロボット専門研究所「NREC」は米政府との共同研究が多い。卒業生はここに残って起業する人も多く、大学発のベンチャー企業は過去30年ほどで200社を超えるという。10月下旬、市内に20人ほどの若い起業家が集った。

事業資金を投資家から獲得するプレゼンテーションに備え、「模擬プレゼン大会」が開催され、ロボット開発の事業プランを披露し合った。ある男性起業家は「ファストフードの単純作業はロボットに置き換えが可能で、実際に開発中だ」と発言。これに対し「投資家役」の別の起業家が問題点などを指摘した。

主催したイラーナ・ダイヤモンドさんは言う。「各地から投資家がピッツバーグを訪問しては、有望企業を探している。ここには製造業の土台があるから新興企業が育ちやすいのです」

口の流出に歯止めがかかっていない。

ここ1年間の失業率は6～8%で推移。5%台後半に下がってきた全米平均より悪い。仕事に就きやすいピッツバーグに移住してしまう人も多い。地元新聞社のエディター、トッド・フランコさんは「経済効果はまだ見えてないが、学生や住民らが街に誇りを持つようになった。再生はこれからだ」。

オバマ政権の重要課題のひとつは「製造業復活」。国の力でもあった中間層が弱くなり、格差拡大につながった。ラストベルトの典型であるヤングスタウンはしっかり再生できるのか。製造業復活を掲げる政権の試金石にもなりそうだ。（ピッツバーグ＝畑中徹）

再生 3Dプリンターに活路

ピッツバーグ市から車で約2時間。オハイオ州ヤングスタウンは人口7万人の小さな街だ。70年代以降、製鉄所閉鎖で4万人以上の雇用が失われた。ピッツバーグと同じように鉄冷えの代名詞だった。

さびた街が約2年前に脚光を浴びた。きっかけは13年2月のオバマ大統領の一般教書演説。最新技術の3Dプリンターに言及し、ヤングスタウンに開設した先端研究施設を紹介した。その施設とは「アメリカ・メイクス」。米政府機関と民間がお金を出し合って、12年夏に設立。2階建ての古い倉庫を全面改築した。ゼネラル・エレクトリック（GE）、ボーイングなど企業が3Dプリンター関連技術を共同研究し、技術の習得もできる。

アメリカ・メイクスに刺激を受けるように、地元のヤングスタウン州立大学（YSU）の学生たちが3Dプリンターのベンチャー企業を次々と立ち上げた。

昨年11月に創業したプラビューラ3Dはその一つ。卓上型の3Dプリンターを自前で開発中だ。YSUで学んだブライアン・アレスさん(33)とジェシー・タスカーノさん(28)が共同創業者。タスカーノさんは「アメリカ・メイクスを訪問して、『私も3Dプリンター企業をつくりたい』と相談に行った」。地元生まれのタスカーノさんは親類5人が鉄鋼不況で失職した話をよく聞かされた。

ジャガーボット3Dは、YSUを卒業したダン・ファーンバックさん(22)が創業。昼間は地元の会社でエンジニアをしながら、夕方や休日に開発に打ち込んでいる。需要が急増すると予測される個人向けの3Dプリンターの開発・販売をめざす。「いずれラストベルトでなく、技術で有名なテックベルトに生まれ変わるよ」とファーンバックさんは話す。

ヤングスタウンは、歌手ブルース・スプリングスティーンの悲しげな歌で知られる。活気は出てきたが人

ラストベルト（rust belt）
米中西部や北東部で、主力の製造業が衰退した工業地帯の総称。ミシガン州やペンシルベニア州、ウィスコンシン州、オハイオ州、ニューヨーク州の一部などが含まれる。自動車産業で繁栄したが、2013年に財政破綻（はたん）したデトロイトも含まれる。英語で「ラスト（rust）」は金属のさびのこと。

ラストベルト（■）は米中西部から北東部に広がる

月面探査車を開発するアストロボティック・テクノロジー社のソーントン最高経営責任者＝畑中徹撮影

ワールド けいざい

文字が小さいので、朝日新聞記事　下記に転載　**2014.12.7. 朝日新聞朝刊の記事より**

https://www.infokkkna.com/ironroad/2014htm/2014iron/201412asahikiji.jpg